

農報

水稲



平成 27 年産早期水稲について



水稲
新木 真一
農畜産課 課長
0969-22-1105

いよいよ平成 27 年産の早期水稲も始まります。異常気象を受けにくい稲を作るには、まず健康な稲を作ること、健康な稲を作るには適正な育苗管理と適正な水管理を行うこと、そして土作りです。

また、昔から「苗半作」と言われています。早期水稲の場合、気温が低い厳しい条件下での田植えですので、苗の良否が初期生育に大きく影響します。

品質の良い米づくりのために、健苗の育成に努めましょう。

本田の準備については堆肥や土壌改良資材の投入と、作土を 15 cm 以上確保するよう心掛けて下さい。

育苗施設の点検・準備

約 1 ヶ月間の育苗期間となります。春一番等突風被

害が毎年見受けられますのでハウス資材の点検と修繕は早いうちに行いましょう。

健苗の育成

種子は充実した、健全なものを使いましょう。そのためには必ず種子選（比重選）を行って下さい。（比重水 10 リットルに塩 2k g）

病害虫防除のために種子消毒と育苗箱の洗浄を行いましょう。種子消毒に使用した消毒液は河川や用水路に、流さないようにしてください。

早期水稲の育苗日数は 25 日程度ですので、逆算して播種目を決定しましょう。2 葉苗～2.5 葉苗の場合の播種量は乾籾で 150 g（催芽籾では 180 g）が標準となります。

播種に最も適しているのは、ハト胸状態の時です。そのためには十分に浸種を行って下さい。また、水の入れ替えと、1 日 1 回は攪持して水温が均一になるようにしましょう。

果樹



2月柑橘園管理



果樹
木蜜 栄次
上島営農指導センター
080-1759-0088

1、土壌改良・施肥設計計画（土壌分析の実施）

春先の表層根の発生をよりスムーズにするため、堆肥などを投入し、健全な土作りを行いましょう。また、土壌分析を行うことでその園にあった施肥設計ができますので、分析を行い高品質果の生産に取り組みましょう。

時期	資材名	10 a 当たりの施肥量	備考
1月～3月 (収穫後)	堆肥	2,000 kg	完熟物
	ヤシガラ	20袋以上	1袋=2キュービック 120ℓ (約11kg)
	土の恵み	12袋以上	堆肥とヤシガラを入れない場合 (地力+ヤシガラ)
	客土	4,000 kg	3cm 以内
2月上旬	炭酸苦土石灰	10袋	PHの高い園はマリンカル
2月上旬	新有機・中晩柑一発 (超省力化タイプ)	10俵/10 a	デコポン・清見・河内晩柑・甘夏・パール柑

2、樹勢回復・着花対策

収穫が終わった品種については、早急にチッソ主体の葉面散布を行い、樹勢回復を行いましょう。その後、発芽までにリン酸・カリを主体とした葉面散布を行いましょう。

【葉面散布】

時期	目的	資材名	倍数
収穫後	樹勢回復	尿 素又はアミノジューシN-14	500倍
		神協スピリッツ	500～1,000倍
2/10頃～	花芽分化促進	ファームント又はジューシーエース	500倍

※葉面散布を行う時は、天気の良い日にたっぷり散布してください。特に、着果過多だった園については、樹勢回復が着花のポイントになります。（4日おきに3回連用）

3、病害虫防除

・ミカンハダニ・・・2月下旬～3月上旬 ハーベストオイル97% 80倍

※12月下旬～1月に散布した園は控えましょう。

※樹勢低下樹については、落葉を助長する恐れがありますので注意が必要です。

4、縮・間伐の実施

縮間伐を行わないままですと、隣同士お互いに生育を阻害してしまいます。また、作業性にも影響を与えますので、縮間伐を行い健全に育つようにしましょう。

5、整枝・剪定

剪定を行う前に、まず誘引を行い、枝と枝の間隔を広げましょう。その後間引き主体の剪定を行い、十分に日が当たるようにしましょう。また、デコポンでは、花が少ないと思われる園地については、花を確認した後剪定を行いましょう。



シシトウ・甘長とうがらし栽培



野菜
山下 伸一
下島農指導センター
080-1729-1630



定植

1. 植穴は、苗鉢よりもやや大きめにし、50～70cm間隔であける。
2. 定植苗は、第一果房が開花する3～4日前の若苗を定植する。
3. 定植時には、アブラムシ・スリップス対策としてスタークル粒剤を1株当たり1～2g植穴処理する。
4. 定植を行う際は、鉢土の上2cm位が見える程度浅植える。
※植え付けが深いと白絹病や疫病の原因となる。
5. 定植後、初期生育促進の為に、株元に液肥灌水する。
6. 定植後、直ちに支柱に誘引する。

定植後の管理

1. 定植後7～10日頃までは、鉢土が乾燥しないように株元に灌水し、根の活着を促す。
2. 活着後は、徐々に灌水量を減らし、根を深く張らせる。

3. 第一分枝以下の果実・脇芽は、早めに取り除く。
4. 定植後20日前後までに、本支柱及びネット張り(2m間隔)を行う。

整枝・誘引

1. 整枝は、出来るだけ中心に光線が入るように摘芯する。
2. ネット張りは、樹の生育に合わせて行う。高くなった場合は、2段目を張る。

施肥量

シシトウ 10a 当り /kg

必要成分量	N	P	K
元肥	30	25	30
追肥	10	10	10
合計	40	35	40

甘長とうがらし 10a 当り /kg

必要成分量	N	P	K
元肥	15	20	15
追肥	15	15	15
合計	30	30	30

詳しいことは各地域の担当者、又は栽培講習会等でお聞き下さい。



ストレスについて



畜産
山下 和彦
下島農指導センター
080-1766-6339

最近の子牛の相場は高値傾向で推移しています。発育の良い子牛ほど購買者に喜ばれて高値で取引されていますので、発育良好な子牛を飼養することが求められます。

今回は、その障害になりうるストレスについて掲載します。

<ストレスとは?>

外部から何らかの刺激によって心や体に負担がかかり心身に歪みが生じること。

人間はストレスを感じることで体調を崩しがちですが、牛も人間と同じくストレスで体調を崩します。ストレスがかかると免疫力が低下し、さまざまな病気に感染しやすくなり、病気への抵抗力が落ちるといことです。

<どのようなストレスがあるか?>

- ①温度変化、アンモニアガス
- ②エサの急変
- ③輸送、移動
- ④密飼い

など、さまざまなストレスがあります。

①温度変化、アンモニアガス

牛が発育するには適した温度があり、一般に以下のようになっています。

	適温域	生産環境限界
哺乳牛	13～25℃	5～32℃
繁殖牛	10～15℃	-10～30℃
肥育牛	15～25℃	5～30℃

※天草の2月平均気温は約7～9℃なのでまだまだ寒い日が続きます。

・子牛は外気温が15℃以下になると、体温維持のためにエネルギーを消費します。特に冬場はエネルギー不足、栄養

不足になりがちです。牛を良く観察し、体調の変化を早期に見つけることが大切です。

- ・子牛の場合、保温のために外気を遮断したりしますが、アンモニアガスの充満や細菌の増殖も促します。(呼吸器病の発生、肺炎など)
- ・天気の良い日には適度な換気や運動場等への子牛の開放をされるといいでしょう。

②エサの急変

- ・哺乳子牛では代用乳の濃度や温度があります。濃度は子牛に負担がかからないよう徐々に上げ、子牛が飲む際の温度のチェックをするといいと思います。
- ・代用乳、濃厚飼料の多給により消化不良による下痢が発生したりします。
- ・過度の給餌はなるべく避け、観察しながら子牛にあった給餌を行って下さい。
- ・このようなストレスで腸内環境も悪化するので生菌剤を与える方法もあります。

③輸送、移動

- ・牛の長時間の運搬は神経を使い疲労も溜まりますが、人間と同じく牛も輸送では、せり市場への輸送ストレス。移動では牛房の移動ストレス等があります。(精神的不安)
- ・飼養する中で、一度は必ず行うことでも些細なストレスが生じます。

いくつか例を挙げましたが、この他にもストレスはさまざまと存在します。ストレスの完全除去は難しいですが、それぞれの飼養管理の中でどのようなストレスがかかっているのかを見つけ、軽減していくことが大切です。

ストレスによる障害をなくし、良い子牛の生産に努めましょう。